

# 船本同志へ——勇敢なる位置に立つた

人船次郎

袖を血で染めし

もし娘が来て

この街に力やをかけとも

ワシらはそれをこわす。

一つかけたら、二つこわそつ

二つかけたら、二つこわそつ

三つかけとも、三つこわす。

おもし取等が来て、つてのむ

この街を封鎖しても、つてのむ

ワシらはそれを突破しよう。

ワシらは兄弟たちのつてのむ

ワシらはワシらを取る四も

——那压と吸毒に左翼との——

——分断と孤立との——

——いへつもの——

袖を血で染めて進むだろう。  
画政なる位置に立つた

野士たちの後に焼くせろう。

コウちゃんの、がつしりとした身体のもの  
のようは、太く重たい声がやつべじしす  
かに聞こえ、無手のようだとほにいる者をと  
らえる。腰こしで吉原へ向かう。

「労働者の生活をよく知らなければいけな  
い。どうやって、メシを食い、クソをたれ、  
仕事をしてしているのか。どうやって反抗し、斗  
やり返して来たのか。」

ひろげられた太い五本の指が、言葉の一句  
一句にあわせて、上下にゆづくじゆづくられる。  
「下層の労働者は、こつこじ時に、ひヒリ

に分断されてしまった。オレ、反抗もどうだった。

そして、オレたあヒモ、犯軍者ヒされ、裁判ヒリの連絡をひとりで責められ、最優秀で獨立させられしてきた。

お厚い唇のあじだからのかく、歯に噛まれした前歯が、したしまおむかれる。ヒセヒは、その歯こぼれの上を、上へ伸びるにかるべくのせるようにして、じてとうごみす・こんなヒき、腰ぬれま、こ、笑つこころ。

「ひヒツの人間が経験しうる現実は限られている。おヒ、この現実のすべてをとらえることはむずかしい。ひヒツの人間に夏いかかる矛盾が、切迫しひいれはいるほど、ひヒツの

人間の力とはその根柢はつかみにくく、口は脱けにくく、口が、のしかかる矛盾が切迫していれはいるほど、それを解決する根柢は必ずあり、それと解決せざるなえなし能力——力が、必ず、かくされこいる。確信をもつてる目は薄いマユの下で大きく、相手の心の動きと音葉をうけどみて、ひらに

6月赤いバラを奪つたのは誰だ。  
夜を駆け  
命を抜ける  
戦士たちが立った血面をひとたん。  
彼等の背後に立つのせ詠」。冗談は抜けられなければならぬ。

見たものには  
、見た・と言わば口はならない。  
由魂の魂にたどりも離した  
、不屈のうだくに叫びし  
口もヒヒツの輪を締めて出で立つて  
あなた。  
あなたはあなたがり。

6月の赤いバラを  
奪つたのは  
、口もヒヒツの輪を締めて出で立つて  
あなた。

あなたはあなたがり。  
あなたはあなたがり。

「セシヒ、喪失の船体を荷負わされた（者）存亡不明）その現実船体と方舟しなければ解放されえなし存在である ゆえに、この現実船体の解説（この世界のなりたつこじるしくみのすぐひと）、見ぬきうる存在なのである。

私は私たち、船員や、貴君は船員、船員は私

6月の赤いバラを奪つたのは誰だ。

「セシヒ、喪失の船体が空をつかみ

もんヒヒツうつて立ちあがつたところから

あなたはあなたがり。

大地が黒じ

海の始まるヒヒツの人びとの

幸運が不幸を受けて船で戦士たちの

赤い糸に身をとつなげ

あなた。  
あなた。

あなたはあなたがり。

着やうかの歌が、りじな、ヒいってこいた夜は、笑かつて、  
風の飲みにい夜は、酒だけではなく、世界を、人びとを、過去も未来も、すべてがい。ヒ。おじい夜ではなかつたのか。

アロレタリアーートである裏ヒ、野たれ死んでたぐく冬ヒの、複数の季節のまつたさ中で、あんたのかすれに声が、夜を動く。

この世界は螺旋に進む、図られた、丸い世界に囲う者たちは、生れた現実のあるがままの姿で、生きた人びと石、咲氣はいおにかえる。

生れたる者は、苦悶してこいる者である。これまで、その矛盾に立ち向つてこいる者である。そこには、力がある。その力は、抱きしめる力がある。苦悩する者たちを抱きしめる力がある。力がある。そこには、現実のすべてを見おく、力がある。

醜惡な「人間」・天皇を産みおどしこの國の・風土病。が、温フ氣の多い春節風に吹かれこまぢ生きて積けている。東アジアの人びとを・南方の人びとを・踏みつけつけている。

（原文）

母け恒なしの言葉をきくものば  
なんた。じつはため、うつむかへて、眞美の上  
苦惱する人びとへの、精神的慰めの爲めの言  
いふりない愛だ。され、われの西、地獄つきめ  
苦惱する人びとへの、精神的慰めの爲めの言  
いふりない愛だ。され、われの西、地獄つきめ

苦惱する人びとの先に立ち

勇敢な位置で身構えた勇士たち

敵の生命断つ

鋼鉄の武器で抵抗し

やうへりヒ、静かに歩む君たちは

しぶし

誰よりも心あたたかい者たちさつて。正

に呼吸を止めこころむ時

世界ヒ自分との間を分ける

皮膚一枚の緊張を支えるものは

なんだ。・・・

奥深のようだるみ

ここを話すヒキは、まさしそうにして。ほんとく

瞑視をして。

また来ん君ヒ人は云ふ

しかし私は辛いのだ

君が来たつて何になろう

あの子が返つて来るぢやない  
おもへぼう年の五月には  
おまへ乞抱いて動物園  
象を見せても痴といひ  
鳥を見せても痴せつた  
最後にみせた痕だけは  
角によつほど惹かれてか  
何とも云はず、眺めてた  
ほんにおまへもある時は  
此の世の光のたゞ中に  
立つて眺めるだけが……

戦う者を孤立させた者は、ほん、きま  
つて自らも孤立する者たりである。離らか  
さを待ち得ない工セ左衛門は、ハイエナのよう  
に人民のヨレを喰にあたる。

無理な露宿せらしに、浜辺には、ホラ貝ヒ  
サクラ貝ヒバ刀貝が廢棄を放つてうごめいて  
いる。

伸びたつに

駆けたつに

運洋を渡る。

感されこのよだれに強つかかる

喉の咽喉は

宙百にたどりようの

想い、たゞじ敵にこ

王を越ける。

